

韓国民俗学における「歳時風俗」の概念について

—越境的民俗学史のために—

九州大学大学院 人間環境学府 博士課程 大石 和世

はじめに なぜ韓国では、「歳時風俗」というか？

韓国で「歳時風俗」というと通常、正月や秋夕（中元）、端午などに行われる伝統的な行事をいう。つまり、日本でいう「年中行事」に相当する。新聞・雑誌などでしばしば目にする語彙である。韓国民俗学において、「歳時風俗」は学術用語であり、概説書や調査報告書に独立した項目として登場する。「歳時風俗」の辞書的な定義とは、近年出版された『韓国民俗文化大事典』によると、次のようである。

歳時風俗

毎年一定の時期に繰り返される週期伝承の儀礼的な風俗。歳時、歳事、月令、時令ともいった。歳時風俗の「歳」は一年、「時」は四季を意味する一年四季の行事であり、「無時」とは違い特別な意味をもっている風俗である。この歳時風俗の日を名節とすることによって、年間生活過程でつぎの段階への移行にリズムを与え、活動的な生活の営みを助けた。（金容徳2004:1027）

この定義は、韓国の著名な民俗学者である李杜鉉が1974年に著した『韓国民俗学概説』の記述にほぼ従っている¹。李杜鉉は、以下のように「歳時風俗」を定義した。

歳時風俗とは毎年一定の時期が来ると慣習的に繰り返して行われる特殊な生活行為、すなわち週期伝承の儀礼的な行為をいう。最近ではふつう年中行事というが、古くから歳時あるいは月令、時令と呼び、とくにその季節を強調している。歳時風俗は節日すなわち祝日とし年間の生活過程に一つのリズムをとり入れて、次の生活行為に拍車をかける、いわば生活のアクセントとしての役割をしてきた（李杜鉉1977（1974）:168）。

これは、1966年に出た和歌森太郎の著作『年中行事』に見られる定義にきわめて似ている。和歌森太郎は、つぎのように、「年中行事」を定義している。

年中行事とは慣習習俗の中で、特に年内の或る時機時季に臨んで、特殊な営みが、原則上毎年くりかえし行われるものを指している言葉である。（中略）中国でこれに相当するものは「歳時」「歳事」あるいは「月令」「時令」などであった。これらの語も古代宮廷関係の記録の中には往々にして用いられている。総じてこれらは、年中行事のもつ時季性を著しく示しているといえよう。

（中略）

しかし、オイメにしてもシチにしても、一年間の単調な流れに節をつけ、幾つかに区切りをつけるものという意味をもっている。年中行事とは、そうした性質のもので、年間の生活過程にリズムをつけるように、或る段階段階で、特別な営みを行うことにより、次の段階へと拍車をかけるものである（和歌森1966:1-2）。

両者は内容のみならず、「拍車をかける」などの独特の言い回しまで類似している。このことから李杜鉉は、和歌森の『年中行事』を参照して、韓国語で言うところの「歳時風俗」の定義を下したという

ことがいえる。

また、「歳時風俗」と「年中行事」のカテゴリーについても比較したい。まず、韓国における「歳時風俗」の項目を見る。上にみた『韓国民俗学概説』の目次は次のようになっている。

- 第1章 序論
- 第2章 村と家族生活
- 第3章 衣食住
- 第4章 民間信仰
- 第5章 歳時風俗
- 第6章 民俗芸術
- 第7章 口碑文学

第2章には、部落、家族と親族、冠婚葬祭の項目が含まれている。『韓国民俗学概説』のはしがきに、「産業と民俗」、「物質文化部門」について不備であることが指摘してある（李1977（1974））。「物質文化部門」は他の章立てとは異なるパースペクティブからの内容となったであろうと推測できるので、『民俗学概説』の著者らは、民俗の「全体」を、村と家族生活（冠婚葬祭を含む）、衣食住、民間信仰、歳時風俗、民俗芸術、口碑文学および産業と民俗に分類したことがわかる。ここで「歳時風俗」は民俗学「全体」の下位分類として位置づけられている。

つぎに、日本における民俗の分類を見たい。『韓国民俗学概説』と同じ年に発刊された『民俗調査ハンドブック』の目次には、民俗調査の質問文例の項目として順に、村落組織、家族と親族、生業、衣食住、人生儀礼、信仰伝承、年中行事、芸能・競技、口承文芸があがっている〔上野1974:4〕。両者を比較すると、その項目がほぼ一致することがわかる。

このように、韓国民俗学に日本の民俗学の「年中行事」の定義を引用することが可能だったのは、民俗の分類上、「歳時風俗」と「年中行事」の位置づけが類似しているためである。

しかし、これは単純な借用とは言えない。韓国には「年中行事」という語が存在するにもかかわらず「歳時風俗」という語が選択されているからである。しかも、民俗の下位分類としては「歳時風俗」という語は不自然である。「風俗」は「歳時」の上位概念で、「民俗」の類義語と考えられるからである。にもかかわらず、「歳時風俗」という語が選択された背景には、日本の植民地支配と朝鮮の民族主義、そして、韓国の国家アイデンティティの構築という問題がかかわっている。このことをふまえつつ、本論文では、韓国民俗学における「歳時風俗」の概念の成立を通して、韓国民俗学の成り立ちについて接近してみたいと思う²。

人々のくらしのいとなみは国境によって区切られているわけではない。しかし、多くの論者が指摘しているように、民俗学における日韓の民俗の比較は「日本」や「韓国」という国家の固有性の議論に帰結したり、古代にさかのぼって両国家の文化的同質性の主張に結びついたりする傾向をもっている。それは、両国が一国民俗学という枠組みを現在も強く保持しているからである。これを克服する越境的な民俗学の試みとして、島村恭則の「多文化主義民俗学」（島村2001）や須永敬の「日韓国境域」の視座（須永2003）が提唱されている³。わたしはこれらの試みに同意し、それぞれの民俗学があたかも国ごとに成立しているような民俗学史の記述についても越境的な検討が必要ではないかと考える。

岩竹美加子の論文「『重出立証法』・『方言圏論』再考」は、越境的民俗学史の試みであると考えられる。岩竹は、柳田国男の「重出立証法」・「方言圏論」を当時のヨーロッパ文献学のかかわりで分析し、柳田がこの近代的知の体系において西欧に対抗的な言説を構築してきたことを示している（岩竹1999a、

1999b, 1999c)。そして、論文の末尾において、「西欧的アカデミズムを内部化しつつ、いかにその権威に抵抗しカウンター・ナラティブな視点を提示してゆくかは今日的な試みであり、その点においても日本の民俗学は、「ポストコロニアル」的状況にあると思われる。また、そういった状況にあることを認識しないで、現在の議論は行なっていくことはできない。」(1999c:35)と指摘している。日韓の民俗学においても、おなじことが指摘されるだろう。

日韓の民俗学に関していえば、1990年代以降になってようやく、植民地主義と朝鮮・韓国民俗学とのかかわりについての議論がさかんとなってきた。とくに川村湊の『「大東亜民俗学」の虚実』は大きな影響を与えている。しかし、これまでの研究は、植民地期に集中し、解放前、解放後の民俗学の連続と断絶、解放後(1945年以降)の日本民俗学と韓国民俗学との関連に関する検討はまだ十分ではない。たとえば、任敦姫、ロジャー・L・ジャーネリは、両国の民俗学は歴史復元的性質を帯びている点で類似していると指摘している。そして、植民地状況下における崔南善の研究を再検討している⁴。しかし、植民地期の分析をもって、現在の日韓の民俗学を規定することはできない。むしろ、解放後、歴史復元的接近がどのようにとられたか、韓国民俗学の学の体系の形成過程と日本民俗学とのかかわりがどのようなかについて検討する必要がある。

本稿では、この越境的民俗学史の視点から、ポストコロニアルな状況下において韓国民俗学がどのようにして民俗が体系化されてきたかを明らかにするものだが、ここでわたしは、そのイデオロギーや目的を追究するよりも、学問の方法に注目したいと思う。それは、学的成果を単純に植民地主義に還元する議論を避けるためである。

なお、ここでは、議論の混乱を防ぐため、「歳時風俗」、「年中行事」、「名節」などの用語が指示する対象を「歳時の行事」と記す。したがって本論文中で「歳時の行事」が意味する範囲は、議論の文脈によって異なる。

1. 「歳時記」から「年中行事」へ ―朝鮮時代後期から植民地期―

1-1 歳時記の成立(朝鮮時代後期)

この節では朝鮮時代後期、「歳時風俗」という語がどのように用いられていたかを確認したい。

金明子は「歳時風俗」という語は近代社会になってから作られたものであるとしている(2003a:194)。たしかに、データベース『韓国歴史情報統合システム』[<http://www.korean.history.or.kr>, 2007年11月15日]で「歳時風俗」を検索すると、近代以前の文献はほとんどヒットしない。このことから、「歳時風俗」という語は朝鮮時代までは一般的ではなかったと推測される。「歳時風俗」の使用例が見られるのは、朝鮮時代後期になってからである。朝鮮後期、後に歳時風俗研究の最も重要なテキストとなる三つの歳時記が執筆された。それは、柳得恭著『京都雑誌』(1800年前後)、金邁淳著『洌陽歳時記』(1819年)、洪錫謨著『東国歳時記』(1840年前後)である。鄭勝謨によると、この時期、朝鮮は清国から多様な注釈書を輸入した。当時の知識人たちは、朱子性理学の名分論を克服するなかで、これらの本を通して新しい知識に接し、それまで無視してきたような事実注目するようになった。その過程で朝鮮固有の風俗にも興味をもたれるようになったという(鄭勝謨2007:17)。

当時の「歳時風俗」という語の使用例を検討すると、三つの歳時記のなかでは金邁淳の『洌陽歳時記』の冒頭でしか使われていない。そこには次のように記述されている。

江村で永い夏をもてあましていたが、偶然呂侍講が歴陽にいたとき、名節の日には講学を休み、寄り集まって飲酒しながら、歳時風俗を記録したことをおもいだした(姜在彦1971: 234)⁵。

金邁淳著『洌陽歳時記』の「歳時風俗」という語は、単に歳時に行われる風俗という意味で用いられているとも解釈できる。一方、柳得恭(『京都雑誌』の著者)は、この語を、年間におこなわれる行事の総称という、現在用いられるところの「歳時風俗」と同様の意味で用いている。彼は、『古芸堂筆記』5巻(1793-1796)の「歳時風俗」という題目の項で、「わがくにの歳時風俗は中国の故事にしたがう場合が多い。」と述べ、中国の文献に見られる正月や、四月八日、端午の風俗と、これに類似する東国、すなわち朝鮮の風俗を比較している⁶。

上記二例の「歳時風俗」の用法から判断すると、かれらは中国との比較でこの語を使用していることが分かる。鄭勝謨は、当時の歳時記に見られる中国の歳時資料の提示は、「今までなかった、考証の方式を広く適用して差異点を比較してみようとするところにあった。すなわち、文の背後には中国に無いわれわれ固有の風俗を求めようとする執筆者の努力がこめられている」とのべている(2007:17-18)。この比較の視点が、「風俗」という地域的差異を含意する用語を選択させたと言える。

1-2 カノンとしての「歳時記」の創出(大韓帝国時代から韓国併合)

近代に入ると国民啓蒙運動とのかかわりで歳時の行事が注目されるようになる。近代に入って年間におこなわれる行事の総称として「歳時風俗」という語がはじめて用いられるのは、1909年、西北学会発行の月刊誌『西北学会月報』10号、13号-15号に掲載された無記名の記事「我国歳時風俗記」[西北学会1976]の題目においてであると思われる。

『西北学会月報』は次のような時代背景のもとで発刊された。朝鮮は19世紀中ごろから、列強からの植民化の圧力のもとで、国家の存亡をかけて国内の近代化を推し進めていた。そして、国号を「大韓帝国」と変更し、近代国家の体制を整えようとしたが、ポーツマス条約の締結によって日本の「保護国」とされた。この「保護国」下でさまざまな団体が植民地化に抗して抗日独立闘争をおこなった。その中の一つが西北学会である。西北学会は国民啓蒙運動の一環として、機関紙『西北学会月報』を出版した⁷。

この雑誌に、朝鮮時代に執筆された『洌陽歳時記』の翻訳「我国歳時風俗記」(以下、西北学会版と記す)が掲載される。記事の冒頭につきのように『洌陽歳時記』が紹介されている。

世界各邦に各其風俗の慣例が有り、雖其不經不雅な者が有るとしても、成俗が已久者は聖人も從之ところだ。入境向俗は禮經所在だが、他国の風俗も不可不知なら、況本国。乎あ、臺山先生金邁淳氏が我国謠俗の一年十二月佳時令節の八十餘事を記述して、曰洌陽歳時記としたことだ。どうして本国風俗の史料とならないであろうか。故に茲に謄載する(1976(1909):185-186)⁸。

翻訳者の主張とは次の三点である。第一に、国家という領域にしたがって風俗が弁別されること、第二に、風俗には調査する価値があること、第三に、自らが属する国家の風俗について知ることが重要だということである。すなわち、歳時記をナショナルなテキストとして読解するべきだと主張している。

このことは、執筆者の編集のしかたからもわかる。西北学会版の底本は高麗大学校図書館所蔵の筆写本『洌陽歳時記』(以下、高麗大本と略す)だと思われる⁹。この高麗大本と比較すると、両方のテキストには三つの大きな違いが見られる。第一に、高麗大本は、漢文で書かれているが、西北学会版は漢文ではなく、ハングル交じりの書き下し文で記述されている。第二に、表のように、高麗大本で朝鮮を示

す「東」の字の一部が、西北学会版では、「国」や「邦」になっている。最後に、西北学会版からは、高麗大本にある跋文と本文中の九ヶ所¹⁰が削除されている。この異同のある九ヶ所中、八ヶ所が中国の風習に言及した個所である。つまり、翻訳者は、文中から中華思想を注意深く取り除き、漢文ではなく朝鮮固有の文字であるハングル混じりで表記することによって、歳時記をナショナルなテキストとして再編したのである。

表 朝鮮を指示する用語の異同 ※ () 内は見出し、または頁。

| | |
|-------------------|-----------------------|
| 高麗大本『洌陽歳時記』(朝鮮後期) | 西北学会版「我國歳時風俗記」(1909年) |
| 「東俗」(正月上旬) | 「國俗」(第1巻第10号、33頁) |
| 「我使」(正月上旬) | 「我國使」(第1巻第10号、33頁) |
| 「朝鮮」(五月端午) | 「我國」(第2巻第13号、40頁) |
| 「吾東」(六月十五日) | 「吾邦」(第2巻13号、42頁) |

『京都雑誌』、『洌陽歳時記』、『東国歳時記』の中には中国古典に依拠した文言がしばしば見られる。近代以降、多くの学者たちが朝鮮時代の儒学者の事大主義的な偏向を指摘してきた。これに対して、金明子は「著述動機は、慕華思想や事大主義として理解するよりも、民族の主体性と矜持にたいする学者的良識をより高く評価しなければならないであろう」としている(金明子1990:360-361)。すなわち、朝鮮時代後期の歳時記の記述と近代の民俗研究との連続性を主張する立場である。

一方、近代から解放までの歳時風俗研究史を整理したイ・チャンイクは、上記の序文を「この序文を通して、われわれは近代化と植民化が同時に進行した時期に生まれた自国の文化にたいする新しい認識をうかがうことができる」(2005:90)と解釈している。上で検討したように、わたしもイ・チャンイクと同様、国意識の連続性よりも断絶に注目する。近代知識人たちの示す中国文化の記述にたいする違和感の表明は、彼らが国境内部、民族の構成員とその文化を一つの全体とみなし、自らをこれに帰属させるという新たな傾向を示している。

西北学会編「我國歳時風俗記」が発刊された翌年、韓国併合条約が締結された(1910年)。そして、その次の年の1911年、崔南善編纂『東国歳時記・洌陽歳時記・京都雑誌』が発刊された¹¹。現在に至るまで、朝鮮、韓国の歳時風俗に言及する論文のほとんどが光文会版『東国歳時記・洌陽歳時記・京都雑誌』を参照している。民俗学のみならず、朝鮮・韓国文化史上の基本図書といってよい。朝鮮時代、歳時記は漢文を読み書きする両班層の男性に専有されていた。しかし、近代となり、歳時記は民族共有の国家のカノンとして創出されたといえる。

1-3 「年中行事」の導入と調査(植民地期)

1-3-1 植民地期の評価

植民地期の歳時風俗研究について、鄭勝謨は次のように述べている。「植民地期には政府筋の日本人学者と金允経、呉晴、崔南善たちがこれに関する文章を残したが、漢文体ではないということ以外には、それまでの文とたいした違いはない」[鄭勝謨2001a:288]とし、歳時風俗関連資料のリストに、植民地期に発刊された著作を一冊も掲載していない。鄭勝謨の見解に従えば、植民地期は、歳時風俗研究の空白時代であったということとなる。

鄭勝謨が植民地期の歳時風俗研究について低い評価を下しているのに対して、金宅圭は植民地期を含めて、1960年代までの研究を「風俗誌の性格をこえていない」(1997:18)としながらも、次のように崔南善らによる研究を積極的に評価した。

歳時風俗に関する科学的認識は、日帝植民地治下において歴史民俗学、比較文献学的視角から、民族主体の再定立という理念の下に、資料が集められ研究されはじめたといえる。崔南善は『東国歳時期』、『洌陽歳時期』、『京都雑誌』を再刊行し、『朝鮮常識問答』において、歳時風俗の土着的意味とその語源について論述している。彼は民族意味論的解釈を試みて、一応その可能性をみせている。彼は言語・社会・民間信仰・風俗・歴史などに幅広く関心をもって、民俗学が「学」として立つ可能性を提示した功績が大きい(1997上:16-17)¹²。

崔吉城は、植民地期、朝鮮総督府主導の調査の水準や信頼性に関して、二つの対立する見解があるという。一方は、植民地主義的意図によって調査が歪曲されていると指摘するものであり、他方は、日本人による先駆的な学問的調査を過大に評価するものである。いずれにしても、ナショナリズムのイデオロギー的バイアスによって、総督府調査に対する客観的評価がなされていないと指摘する(2000:184-192)。

学界の風潮として、崔吉城のいうイデオロギー的バイアスが現在も根強いことを認めたくえて、二人の植民地期の歳時風俗研究に関する見解の違いは、むしろ彼らがおかれた時代の差によるところが大きいと判断する。鄭勝謨が金宅圭以降飛躍的に進展した現在の水準に照らして植民地期の研究の評価を下しているのに対して、金宅圭は1960年代、民俗学の方法が定まらない時代に歳時風俗研究を始めた。そのなかで、植民地期の研究が持っていた可能性に注目したのである。

また、かれらの見解の違いは研究の接近法の違いからもきている。鄭勝謨は論文「歳時関連記録を通して見た朝鮮時期歳時風俗の変化」(2001b)に見られるように、歳時の行事の時代相と変化に注目する。この立場からすると、朝鮮文化の本質を古代にさかのぼって探究しようとする「日鮮同祖論」の影響を受けた言説や、対抗的立場をとりながらもやはり朝鮮文化の源流を古代にもとめる崔南善の「不咸文化論」のような業績(川村1996:31-40)は否定されるであろう。また、植民地期の著作のほとんどが資料を文献に頼っていることも、その今日的価値を低めることとなっている。

いっぽう、金宅圭は韓国の基層文化を解明することを目的としていた。彼のいう基層文化という語は、朝鮮半島の現在の地理的領域に適用されるとともに、それからさかのぼって推測される三国形成以前の地理的領域にも適用される。金宅圭が「現在の韓国社会に機能している生活文化から始めて、その伝統性・持続性・指向性を検討し、それが形成された「時の深さ」(time depth)まで考察してみたいのである」(1997下:270)と述べているとおりである。韓民族文化の原点を遡及的に想定し、外来の新しい文化に対置させる立場は、植民地時期の思想を継承しているといえる。

両者ともそれぞれの問題意識に照らしてその学的成果を判断しているが、ここでは、その学問的成果の水準を問うのではなく、当時の著述者たちが、どのような状況の下で歳時の行事に関する文章を書いたのか、解放後の民俗学は植民地期から何を継承したのかを問いたい。そのためには、植民地期の政治的学問的状况に基づき検討する必要があるだろう。

1-3-2 「年中行事」の語の導入と近代／伝統の成立

韓国の併合から10年間の武断統治期、合併直後に発刊された朝鮮光文会による『東国歳時記』、今村鞆『朝鮮風俗集』以外、歳時の行事に関するめぼしい論考は見られない。それは、植民政府が朝鮮人による言論を含めたあらゆる活動を抑圧したからである。また、併合当初、朝鮮総督府において風俗の調

査がこころみられたが、慣習調査や文献調査の際の派生的なものに過ぎなかった。しかし、1919年の三一独立運動を契機に、統治のためには朝鮮人の生活を知ることが必要との認識が生まれ「風俗調査」として民俗資料が精力的に収集されるようになった(朴賢珠1995:9-28)。「風俗」という語は、「上所^レ化曰^レ風、下所^レ習曰^レ俗」の用例に見られるように「教化」の対象とされた「くらしぶり」を意味する(和歌森1980:7)。すなわち、「風俗」は教化する側である総督府からの名づけであったといえる。

朝鮮総督府が実施した風俗調査のなかには歳時の行事に関する報告もふくまれていた。その調査報告書の代表的なものが、呉晴著『朝鮮の年中行事』(1931)と村山智順編『朝鮮の郷土娯楽』(1941)である。『朝鮮の年中行事』は、題名が示すように歳時の行事は「年中行事」と表記されている。また他の個人による著作も、日本語の出版物は通常、「年中行事」として歳時の行事を記述している。たとえば、今村軻は『朝鮮風俗集』(1914)をはじめとする多数の著作の中で「年中行事」を用いている。

『日本民俗大辞典』によると、この「年中行事」という語は漢語にはなく、日本語起源である。日本で年中行事という語が用いられるようになったのは、平安時代からだ。この時代、宮中でおこなわれる行事を月日をおって書いた衝立を置いて知らせるようになった。この衝立を年中行事障子といった。当初、年中行事は宮中の公事としての意味で使われた。その後、民間で一年ごとに繰り返される行事も、年中行事と呼ぶようになったという。それ以前は、朝鮮半島と同様、歳時・歳事・四時・月令などの漢語が用いられていた(坂本2000:310)。

植民地期、朝鮮語で記述された新聞、雑誌記事を見ると、伝統的な歳時の行事は、主に「名日」、「名節」などと表現され、「年中行事」という語も少ないが用いられている。ただし、報道記事で「年中行事」といった場合、近代になって設立された国家機関や団体主催の行事や、例年のようにおこる自然災害や社会的現象などを指す事が多かった。たとえば、『東亜日報』では、「年中行事の警戒日、三月一日は今日。市内各地では警戒大編成、派出所では戸口調査まで」(1923年3月1日)、「鎮南浦 年中行事の市民運動会 桜爛漫な公設運動場で来る5月6日開催」(1933年4月18日)などの記事で、「年中行事」が用いられている。

植民地統治下で活躍した朝鮮人知識人たちは、「名日」、「名節」、「年中行事」などの語彙を用いた。崔南善の場合「名節」、「名日」を多く用い、「歳時行事」という語も使用した(「秋夕」『東亜日報』1925年10月2日-11月1日、「観燈」『毎日申報』1934年5月20日など)。解放後は、『朝鮮常識問答』の場合「名日」という項目(1946:63)に、『朝鮮常識』の場合は「歳時」という項目(1948:10)に歳時の行事を記述している。すなわち、崔南善は、最終的に「名日」、「歳時」を歳時の行事の総称として選択したと言える。

他の研究者は次のとおりである。李能和は、『朝鮮道教史』、『朝鮮女俗考』で「年中行事」を用いている(1977:385, 1927:120)。孫晋泰は、『朝鮮民族史概論』で「名節」を用い(1981(1948):278-281)、宋錫夏は、「農村娯楽の助長と浄化にたいする私見」(『東亜日報』1935年6月23日)、「朝鮮各道風俗概観」(1936a:103, 1936b:96)において「年中行事」をもちいている。

以上のように、植民地期に、「年中行事」という語が導入された。この「年中行事」は、朝鮮語で記述された場合、近代に始まった行事を主に指していた。民俗の研究者たちは「歳時風俗」という語を使用せず、「名日」、「名節」、「年中行事」などを用い定まっていなかった。しかし、民俗の研究者が「名日」、「名節」、「年中行事」などの用語でもって記述した内容は、新聞報道記事で「年中行事」として記述される近代的な事象ではなく、植民地化以前から行われてきたと考えられる行事が中心であった。したがって、植民地期に「近代的」行事と「伝統的」行事の対立の枠組みが構築されたといえる。この対立項に

において、朝鮮の民俗研究は「歴史復元的」性質を帯びるようになった。そして、時代的な古さは朝鮮の固有性に置き換えられて解釈されるようになる。

1-3-3 「年中行事」の資料の収集と分類

朝鮮では日本によって完全に植民化される以前に、朝鮮人自身の手によって朝鮮を文化的にアイデンティファイする試みが行われていた。しかし、韓国併合によって民族主義的運動は弾圧され、その後、「文化統治」期に、朝鮮人、日本人の双方、民、官の双方によって文化的アイデンティティの構築が試みられた。朝鮮人による民俗研究は日本の植民地支配への対抗的意味をもち、朝鮮総督府による「風俗調査」に対抗するものとして朝鮮人主導の「朝鮮民俗学」がうちたてられた（川村1996:31-58）。

歳時の行事に関しても、両方の側から調査研究がおこなわれた。1920年代から30年代にかけて、歳時の行事に関する記事が諺文新聞（ハングルで書かれた新聞）に多くでるようになっていく（姜正遠2003:629）。一方、朝鮮総督府も風俗関連の資料を続々と発刊するようになった。

ここでは、特に1930年代におこなわれた政府主導の「年中行事」の資料の収集と分類の試みについて述べたい。検討するテキストは、朝鮮総督府編集（呉晴著）・刊行『朝鮮の年中行事』（1931）、宗錫夏「農村娯楽の助長と浄化に対する私見—特に伝承娯楽と将来娯楽の関係について」（『東亜日報』1935年6月22日より7月24日まで連載、全20回）、朝鮮総督府編集・刊行（村山智順著）『朝鮮の郷土娯楽』（1941）の三つの著作・論文である。

朝鮮総督府編『朝鮮の年中行事』は、朝鮮の年中行事を日本語で暦順に解説した小冊子である。挿絵入りで読みやすい。著者は朝鮮人の呉晴。彼は当時、総督府の嘱託だった¹³。

日本／朝鮮の対抗関係を念頭において『朝鮮の年中行事』を読むと、この本は両義的にみえる。趙南斗が指摘するように、『朝鮮の年中行事』には、朝鮮総督府発行にもかかわらず、呉晴の民族主義的な主張が織り込まれている（趙南斗1980:88-92）。たとえば、「十月三日」の項には、「古へより十月三日を開天日と云つて、一般に於て大に崇尚するが、この日大倭教では、大祭を行ふのである。開天日とは、朝鮮神話により、国祖の天降を記念すると共に、農功の終了を機会として、天神たる国祖に報謝の誠を表する日である」（朝鮮総督府1931:191）とある。他にも、城主祭や農功祭の項などで檀君に言及している。檀君神話は、朝鮮民族の神話的起源であり、日朝のイデオロギー的対立の焦点となっていた。また、ここに出てくる大倭教は、その民族主義的主張のため朝鮮総督府からはげしい弾圧を受けた新興宗教であった。

一方、呉晴は、解放後、反民族行為処罰法にもとづき、日本の密偵であったという容疑で収監されるなど、親日派として弾劾されている（『東亜日報』1949年5月6日、趙南斗1980:88）。日本と朝鮮のはざまで、朝鮮人知識人、植民地官僚というどちらの立場でも朝鮮の年中行事を俯瞰的に整理するという方法そのものは正当なものだった。

宗錫夏の論文「農村娯楽の助長と浄化に対する私見」は、東亜日報社の依頼によって執筆されたものである。はじめ、東亜日報社は、創刊15周年を記念し「農村娯楽の助長と浄化の具体的方案」に関する特別原稿を公募した（『東亜日報』1935年3月31日）。しかし、寄稿論文中、趣旨に沿うものがなかったため、民俗学者である宗錫夏に寄稿を求め、模範例を掲載したのである（『東亜日報』1935年6月22日）。この公募の趣旨は、創刊15周年を期して「われわれ農（漁、山）村の生活更作と文化振興に対する新しい関心を喚起して、新朝鮮の躍進に一助となる」ことであった（『東亜日報』3月31日）。すなわち、当時の総督宇垣一成が提唱した農村振興運動に呼応した企画であることがわかる。

この論文で宗錫夏は、「伝承娯楽」の分類を試みている。かれは6種の分類案を示している。イ. 機構上分類（たとえば、音楽的、舞踊的、団体、個人、男、女、老、若など）、ロ. 季節的分类（年中行事）（正月から十二月まで）、ハ. 観念的分类（たとえば、情緒感情上、射幸感情上など）、ニ. 地理的分类（南朝鮮地方、中朝鮮地方、北朝鮮地方）、ホ. 存在上分類（時期的、地理的に普遍、特殊で分類）、付. 新式娯楽（音楽会、ソーシャルダンスなど）である（同1935年6月23日）。

朝鮮総督府編・刊行『朝鮮の郷土娯楽』（1941）は歳時の行事ではなく、さまざまな伝統的遊びが収録されている。この本の「はしがき」によると、日本人嘱託村山智順が責任編集をおこない、呉晴は資料の照会蒐集に携わったとある。郷土娯楽の調査は、1936年に始まったとあるので、このプロジェクトもやはり農村振興運動の一環として始められたことが推測される。

『朝鮮の郷土娯楽』には数千項目の遊びが収録されている。その中の多くが歳時に行われる遊びである。その分類項目を見ると、大きな分類項目の順に、「道」－「市・郡」－「娯楽名」となっている。娯楽の下位項目として、娯楽をする時期、娯楽の担い手、遣り方、由来が配置されている。たとえば、「京城」の一番初めの項目には、つぎのようにユンノリが記述されている。

京畿道

【京城】

擲枱（ㄱ） 正月 一般

遣り方 腹背を有する四本の枱を同時に投げ一腹を一点（도）、二腹を二点（개）三腹を三点（걸）全腹を四点（음）四背を五点（모）と計算し、二人、四人、六人が両組に分かれて交互に其の持駒を盤上に進め勝負を決する。

由来 高麗時代より伝来（朝鮮総督府1941:1）。

ここに見られるのは、対象をまず、娯楽の名称や種類ではなく、行政区域によって分節するという方式である。これはデータ収集方法に由来するだろう。はしがきによると、基礎資料は各道知事に照会し、府郡島管下の普通学校に依頼して収集した報告に基づいたとある（朝鮮総督府1941）。均一に満遍なく調査し、そして同じ項目に従って分類、記述するこの方法は、朝鮮時代の歳時記のようにソウルや宮中の行事を一般的な歳時として記述しながら、時々、中国や離れた地域の特色ある風俗を挿入する方法とは対照的だ。

この三つのテキストの関係を見ると、『朝鮮の年中行事』が朝鮮全体の行事を俯瞰的に記述したものであるとすれば、『朝鮮の郷土娯楽』は、歳時娯楽に限定されるが、当時としては精密な調査に基づいて記述したものである。「農村娯楽の助長と浄化に対する私見」が、分類方法を示したとすれば、『朝鮮の郷土娯楽』は分類を実践したものだと言える。つまり、この三つテキストは、朝鮮という領域を分節するための、補完、弁証関係にある三つのアプローチを示していると見ることができる。

ベネディクト・アンダーソンは、『想像の共同体』のなかで、東南アジアの場合、後期植民地におけるナショナリズムの系譜は、直接的には植民地国家の想像の仕方に認められることができると主張する。この想像の仕方は、二つの考えかたが交差して形成される。その「縦糸」をなすのが「すべてをトータルに捉え分類する格子（グリッド）」であり、「横糸」をなすのが「世界は複製可能な複数からなる」という「シリーズ化（セリアライゼーション）」である。この想像の仕方が典型的に現れるのが、人口調査、地図、博物館の権力の制度である。これらは、相互に関連しあって支配下の人間をアイデンティファイし、

その領域の地理、その系譜の正統性を形作り、その想像力を規定したとする。この格子は、植民国家が支配している、または支配を望んでいるものすべて、住民、地域、宗教、言語、産物、遺跡、等々に適用される一方、反植民地闘争の根拠ともなり、独立国家の継承者に引き継がれたという（アンダーソン 1997:273-310）。

歳時の行事もやはり、この格子にしたがって収集、分類された。歳時記は、日付の順にひとつの行為が分類され配列されている。これに、地域や国家という地理的項目が交差することによって、この項目にふさわしい韓国・朝鮮人の行為群が振り分けられ、トータルに朝鮮人の行動様式を想像することに寄与する。近代化にともない生活を対象化する方法として導入されたのは、近代と伝統を二項対立的に捉える枠組みと、生活を地域と暦に区分して精密に調査し、そして分類するという格子の導入であった。分類の目安となったのは、行政区域と時間である。金明子は「年中行事」は日本人の影響によって用いられるようになったと述べている（2003a:194）が、単にその語の使用自体に日本の影響があるのではない。「年中行事」とこれに対置される朝鮮固有の歳時という枠組みと、固有の歳時を分類する方法に、日本による植民地支配の歴史が刻印されている。

ただし、当時はまだ「年中行事」、「名日」、「名節」の使い分けは固定したものではなかった。植民地期は、次章で述べるように、近代／伝統の枠組みによって次世代の「年中行事」と「歳時風俗」を使い分ける論理を準備したといえる。また、朝鮮の歳時の行事の体系化と分類も、歳時娯楽という分野の一部分にとどまった。

先にみたように、歳時の行事への関心は、朝鮮人知識人にとっては、民族主義的な主張に基づくものだった。一方、総督府にとっては、朝鮮半島の生活を知的に把握することによって、朝鮮の領域と資源、住民を統治することが目的だった。両者に立場の違いはあっても、調査、分類による客観的なデータは、当時の日本人支配層、朝鮮人知識人両者にとって朝鮮をアイデンティファイするのに不可欠なものだった。

以上のように、植民地時代に、近代と伝統の対立、全体と部分という思考の型、そして、調査分類という方法が導入されたと言える。そして、これは解放後のナショナリティの構築の方法に継承された。

2. 「風俗」と民俗学 ―解放後から70年前後―

2-1 「歳時風俗」のジャンルの形成（解放後から60年代前半）

この節では、韓国解放後（1945年）から60年代前半までの「歳時風俗」と「年中行事」の使用法について検討する。

印権煥の『韓国民俗学史』によると、民俗学界は、1940年代、日本による言論弾圧と朝鮮戦争によって沈滞期にあった。1950年代になり、学会の改編、専門誌の発刊、民俗調査と民俗誌の整理、新たな分野の開拓がすこしずつ行われるようになり、学的沈滞を脱出しつつあったが、まだその進路について模索段階にあったという（1978:74-82）。

この時代の歳時に関する著作は次のとおりである。解放直後、1946年に言語学者方鍾鉉著『歳時風俗集』が発刊された。研学社の研学文庫の一冊で、岩波文庫と装丁が似ている。この本は、方鍾鉉が植民地期『朝光』に連載していた原稿をまとめたものである。『朝光』では、題目は「朝鮮の年中行事」（1981（1939））で、「歳時風俗」という語は用いられていなかった。先に見たように植民地期、「歳時風俗」は一般的ではなかったので、現在用いられる「歳時風俗」という語の直接的起源は、方鍾鉉の『歳時風俗

集』にあると考えられる。

同年、崔南善の『朝鮮常識問答』が発刊された。また、朴時亨の訳による「東国歳時記」が雑誌『新天地』に掲載される（洪錫謨1984）。翌年の1947年、車相瓊『朝鮮史外史』が刊行され、1948年には崔南善の『朝鮮常識 風俗篇』、李允熙『わが国の歳時記』が発刊される。

印権煥によると、解放直後から1950年代初までは、民俗学研究は沈滞期にあり、歳時風俗関連の研究はあまりされていなかったという（印権煥1997:27）。たしかに、当時発刊された著作は、植民地期に発表されたものをまとめたものがほとんどで、学術的な進展は見られない。しかし、経済的に困難な時代において歳時風俗に関する重要な著作が立て続けに出版されていることから、決して沈滞期とはいえない。沈滞期だったのは、朝鮮戦争をはさんだ1950年ごろから55年ごろまでの期間である。

朝鮮戦争後、民俗学者崔常壽が活躍しはじめた。1956年末から、『東亜日報』に崔常壽による「韓国の歳時風俗－年中行事記－」が34回にわたって掲載された。これは、1957年『韓国民俗学報』第二編に発表された後、1960年に『韓国の歳時風俗』として発刊された（崔常壽1960:34）。この本の副題名は「年中行事記」で、本文中では、「年中行事」という語を用い「歳時風俗」は使っていない。印権煥によると、『韓国の歳時風俗』の特長とは巻末に行事の一覧表を添付したところにある。この一覧表は、後の歳時風俗一覧表の母体となった。印権煥は、この一覧表によって、年間の歳時風俗を一目瞭然に知ることができるようになったと高く評価している（印権煥1997:28）。一覧表によって、歳時の行事の全体とその部分が視覚的に把握可能となり、さらに、他地域との比較対照が可能となった。つまり、一覧表という方法は、暦と地域の格子による分類を視覚化したものである。この意味で、崔常壽の一覧表は、植民地期の遺産を継承、発展させているといえる。

1960年前後、「年中行事」を冠した書物が続けて発刊された。それは、李起弘著『年中行事解説』（1957）、李義宅編『韓国年中行事大観』（1959）、太陽文化社編『年中行事大典』（1961）である。

李起弘の『年中行事解説』の構成は、学校年度にしたがい、陽暦4月始まりで月別に編纂されている。凡例に、「国際的、国家的、民族的記念日ならびに名節、節候等を総網羅した」とある（1959:6）。たとえば、一月の行事の項目を順にあげてみると、「ソル（新暦正月）」、「李奉昌義士義挙日」、「教育聖ペスタロッツ誕生日」、「陸軍創設記念日」、「李栗谷先生誕生日」、「除夕（陰暦大晦日）」が、太陽暦の日付順に配列されている（1959:130-137）。本書は「あくまでも訓話の参考資料として記録した」（1957:6）とあるように、学校教育の現場で活用されることを目的としている。

また、李義宅編『韓国年中行事大観』（1959）の内容もやはり、記念日か国家行事に関する項目が主であり、陽暦で記載されている。たとえば、一月の行事としては、「新年祝賀」、「仁川開港」、「中華民国開国記念日」、「李奉昌義士義挙日」、「教育聖ペスタロッツ誕生日」、「陸軍創設記念日」、「大韓尚武会創立記念日」、「烈士金相玉先生忌日」がある。付録として「二十四節季一覧表」、「歳時風俗」の項が別にあり、「ソル（旧正月）」から「除夕」までの行事と、二十四節季についての説明がある。この本の目的、用途は書かれていないが、本の冒頭に、国旗、愛国歌、国花についての記述があることからわかるように、上記の李起弘の『年中行事解説』と同様、学校での教育指導の参考書として編纂されたと思われる。

太陽文化社編『年中行事大典』（1961）は、上記の李義宅編『韓国年中行事大観』のレイアウトと酷似していることから、同一の組版を一部改訂して出版したようだ。『年中行事大典』の序には「本書は中学校以上各級学校行事教育の副教材としても適合するように編纂した」とある（1961:1）。

すなわち、上記の三冊において、「年中行事」という語は、公的行事、国家的、民族的行事を主に指示していることがわかる。そのなかにソル、端午、除夕などが含まれていた¹⁴。教師用訓話参考書の類

書として、生活教育研究会『教育講話事典』(1959)がある。この本は共同執筆で、夏至、三伏、七夕、秋分などの伝統的歳時の行事の項目は民俗学者の任東権が執筆している。1950年代に、民俗学者が伝統的な歳時の専門家として認知されるようになったことを示している。

以上のように、1960年代前半までには、「年中行事」と「歳時風俗」という使い分けが近代と伝統という二項対立に対応する形で成立するようになった。解放後から60年代にかけて、「歳時風俗」の語の普及に寄与したのは、民俗学者だけではなく、言語学者や教育者、ジャーナリストたちも含まれていた。そのなかで、「年中行事」と「歳時風俗」の語彙の分化と、歳時風俗の専門家としての民俗学者の社会的認知が進行した。また、伝統的生活を記述する「歳時風俗」というジャンルが形成されていった。

2-2 全国民俗総合調査と「歳時風俗」の定義化（70年前後）

2-2-1 民俗学の転換期に関する検討

「歳時風俗」という語が民俗学に本格的に導入されたのは、1960年代後半になってからだ。その契機として、二つのことがあげられる。一番目は、1968年から始まった「全国民俗総合調査」で、「歳時風俗」という項目が設置されたことである。二番目は、「歳時風俗」の概念規定がはじめてなされたことである。

まず、70年代前後の民俗学会の状況について確認する。印権煥、朴桂弘は、1970年代に民俗学は転換期をむかえたとしている（印権煥1978:94, 朴桂弘1987:54）。転換期を迎える直前の1960年代、民俗学は飛躍的に発展した。民俗学発展の要因としてあげられるのが、国学ブームであり、その国学ブームを背景として民俗学が脚光を浴び始めた。同時期に、文化政策が始まり、ブームと相互作用して民俗学の発展をおしすすめた。1963年には文化財管理局が創設され、1968年には、文化財管理局後援のもとで韓国文化人類学会による全国民俗総合調査が開始された（印権煥1978:83）。印権煥はこの時代について、「1960年代10年間はわれわれ民俗学が過去どの時代よりも活発で隆盛した期間であった。それは、民俗学の社会的条件の改善、学会の意欲的活動、学的人口の増加、膨大な資料の収集と整理、分野別専門学者の集中的研究、新しい分野の開拓、新しい方法論の試みなど全般的な面であられた」（1978:83）とのべている。

1970年代は、1960年代の研究が持続し、その整理段階にはいる一方、民俗学の概念修正とその現代的課題と方向の探求など、本質的な問題が論じられているという点で、転換期となった。この時期に大規模な調査がおこなわれ、資料集が発刊された。また、張徳順『口碑文学概説』や李杜鉉『韓国民俗学概説』などの概説書が発刊された（印権煥1978:94-101）。

このような学界の趨勢を、印権煥は次の四点に起因したものであると分析している。民俗学の転換は「第一に、民俗誌的整理とこれにたいする研究がある程度達成し学的土台が準備され、第二に、1960年代に登場した新しい世代との世代交替がすすみ、新しい学風が醸成され、第三に、過去の民俗学ではその歴史を通じて一度も学的反省の機会されていなかったが、この時期の姉妹学と隣接科学の隆盛によって、民俗学がその存在意義確立の必要性にたいする覚醒が不可避となり、第四に、現代文明社会の中で、日ごとに変化、ないしは消滅していく民間伝承をどのように追跡するかという方法論的追求が目前の課題として登場したという点に起因したものであった」（1978:94）としている。

さらに、朴桂弘は1970年代における民俗学の転換を方向付けた契機として、国際学会の開催や韓日共同民俗調査事業の実施、日本での学位取得など、外国民俗学界との交流が行われ始めたことを指摘している（1987:50-51）。

以上のように、1960年代から1970年代にかけては民俗学の定立において極めて重要な時期であったといえる。この研究趨勢のもとで歳時風俗研究もおこなわれた。1970年代の歳時風俗研究に関して、印権

煥は「1970年代に入ると、既存の民俗誌的性格を脱し、歳時風俗を基層文化の解析ならびに文化受容の推測対象とみなして、民族生活の総体的把握に関心を見せ始めた」(1997:28)と述べている。彼がいうように、現地調査にもとづいた歳時風俗の解析は70年代にはいつてから多く発表される。いっぽう、金明子は「歳時風俗の研究は、光復(植民地解放)後1960年前後まで風俗誌の性格を脱しきれずにいたが、1970年を前後として体系的な研究が試みられるようになった」とのべ、転換期を1970年前後としている(1990:363)。

わたしは、金明子に従い転換期を1970年前後とする¹⁵。それは、印權煥、金明子が指摘しているように、つぎのふたつの研究上の変化に注目するからである。ひとつは、現地調査の伸展とその整理であり、これは地域というファクターと地域間の比較という方法を研究に導入した。もうひとつは「歳時風俗」の定義化であり、これは歳時風俗の研究領域の確定化と概念化とともにおこなわれた。現地調査としては1968年にはじまる全国民俗総合調査に注目したい。歳時風俗の概念化に関しては、金宅圭、朴俊圭、李杜鉉の研究を検討する。

2-2-2 全国民俗総合調査

1968年に韓国文化人類学会は文化公報部の後援をうけ全国民俗総合調査(以下、総合調査と略す)を始めた。その翌年、発刊された『韓国民俗総合調査報告書 全南篇』を皮切りに、ほぼ毎年、報告書が発刊されるようになった。本の形態はB5判ハードカバーで、一卷ずつが400ページ前後の大部の報告書である。すでに60年前後から各大学が各地の現地調査をおこなうようになり、調査報告書が提出されるようになっていた(金容徳1994:69)。しかし、全国各道ごとに民俗の全体を項目に分けて調査するという、大規模かつ体系的な調査は総合調査がはじめてであった。総合調査の報告書は、韓国各地の公共図書館および大学図書館に配布され、日本語にも翻訳された(韓国文化公報部1998)。韓国でもっとも普及した現地調査報告書である。

総合調査は文化財保護などに力をいれた朴正熙政権下の文化政策によって可能となった。呉明錫は60-70年代の文化政策を検討し、当時の文化政策は、「政権の体制維持と緊密な関係をもつ政治的イデオロギーの表現方式の重要な部分をしめ、国民たちの意識と情緒に意識的、無意識的にかんがりの影響をおよぼしたということ認識する必要がある」(1998:122)とのべているが、この時期におこなわれた総合調査も「政治的イデオロギーの表現方式」として理解される。

当時の文化政策における総合調査の意義は、報告書の巻頭に記されている。文化公報部文化財管理局長の許鍊は『韓国民俗総合調査報告書』の発刊辞においてつぎのように述べている。

国家の経済建設、国家の富強、物質文明の開化なども民族の伝統や文化を正しく継承することによって結実させねばならないのである。

したがって、われわれはまずわが民族の文化的遺産と伝統を追求して、これを理解し整理しなければならない。そして、その後に他人のものを取り入れ、一歩進んでそれをわれわれの伝統に適応させつつ、新しい文化を創造していかなばならないのである。

ここに、わが民族生活の伝統を発掘・調査して、これを永久に保存・伝承し、また民族文化の発展に寄与すべく全国民俗総合調査計画を立て(中略)ここに報告書を発刊することになった(韓国文化公報部1988 [1969]:1)。

総合調査の役割とは「民族の伝統と文化」の発掘と再構成であり、調査の最終的な目的は国家の経済発展だとして述べられている。当時の民俗学の政治性を考察する場合、民俗学が国家のアイデンティティを構築する政策の一部に組み入れられたという点で、この調査は重要である。

総合調査が民俗学にもたらした影響とは次のようである。まず、この調査は全国を分割する行政地区を単位とした客観的、総合的現地調査を目指したため、全国と地域という概念を導入し普及させた。

そして、その後の民俗調査報告書には、かならず「歳時風俗」の項目が含まれるようになったように、民俗学研究の一分野として「歳時風俗」研究を定着させた。これは、民俗の「全体」と「下位分類」によって構成される調査体系が成立した事を示す¹⁶。この調査の体系は、本論文の「はじめに」であげた『韓国民俗学概説』の分類とほぼ一致していることからわかるように、そのまま民俗学の体系の分類に導入され、学の体系化、細分化、専門化、領域化をもたらした。

また、「歳時風俗」の項は、1月から12月、閏月まで順に配列されるようになった。つまり、リスト化されるようになった。なお、さきに述べたように「歳時風俗」が民俗「全体」の下位分類である以上、「風俗」という語がついているのは不自然である。にもかかわらず「歳時風俗」がもちいられたのは、民俗学の体系化以前に「歳時風俗」というジャンルが形成されていたからである。

総合調査の調査員だった崔吉城は、この調査に当たって総督府による調査方法を参考にしたと述べている(2000:188)。総合調査と『朝鮮の郷土娯楽』を比較すると、総合調査は調査の主体は異なるが朝鮮総督府の方法を継承している。それは、地方の各公官庁の協力を得て全部の地域を均一に調査し、基礎的なデータを行政区域の格子によって分割、分類、蓄積することを目指したことである。

2-2-3 「歳時風俗」の定義化

金宅圭の定義

1960年代末から1970年代にかけて、現地調査の体系化と歳時風俗研究の確立の二つが同時に進行した。以下、歳時風俗研究に寄与した研究者の中で、とくに、金宅圭、朴俊圭、李杜鉉らの主張する歳時風俗概念を中心に検討する。三人の論者たちは、上で検討した全国民俗総合調査に参加した。

金宅圭は歳時風俗研究の先頭に立って研究をおこなってきた。かれは、1960年代までの歳時風俗研究を批判し、次のように述べている。「大まかにいえば風俗誌の性格をこえていない。(中略)(それまでの研究は)民俗学の純粋性を強調しすぎたために、学際的研究をおろそかにしたきらいがあり、分析モデルに対する探求が足りなかったためと思われる。私は、このような傾向に懐疑をいだき、歳時風俗の諸相を韓民族の基層文化における重要な文化要素とみなし、歴史民族学、比較文化論的立場から一連の研究を試みてきた」(1997上:18)。ここにありとおり、金宅圭は1960年代後半より、精力的に歳時風俗に関する調査研究をはじめた。かれの一連の論考は、歳時風俗研究に、現地調査の重視、比較、類型化という方法と基層文化論という理論を導入した。

まず、金宅圭は1966年「慶北地方の年中行事－行事・由来・共同娯楽－」を発表した。これは『慶尚北道民俗文化財実態調査書』にもとづいて、慶北の年中行事を整理したものである(金宅圭1966:321)。この論文の特徴とは、地域を限定して歳時風俗に関する資料を総体的に収集した点、そして、韓国の歳時風俗研究においてはじめてその研究対象の定義をおこなった点にある。その定義とは次のようなものである。

ここでいう年中行事とは、われわれの生活に毎年周期でめぐってきて一定時期ごとに反復される儀礼的な生活営為の系列を意味する(1966:321)。

この定義の背景には、つぎのような年中行事研究の意義付けがある。

われわれは儀礼的年中行事と平素の生産生活との連関がどのようなものであったのかということ考察し、伝統生活内でその位置を把握しなければならない。即ち、時間的に配列された個々の行事間で、一年間を通じた年中行事総体の構造を究明するとともに、生業との有機的連関性に接近しなければならない [1966:321]。

すなわち、従来の歳時風俗研究が、行事を暦順に配列し、各行事を個別に、歴史的に遡及して分析するという方法であったとすれば、金宅圭は、一年を全体として見渡して、その時間構造の把握から考察を始めたのである。時間構造の把握のためには、それまで無意識に取捨選択されてきたさまざまな行事群を、抽象化して定義するという作業が必須である。

その作業が、慶北地方に地域を限定して、暦の順に歳時の行事を一覧表としてまとめることであった。つまり、先にのべたように、暦と地域の格子によって分類し、表の形によって視覚化することによって、その時間構造を抽出することが可能となったのである。その後、金宅圭は、歳時風俗の時間構造と生業との関連から研究をつづけ、1985年に研究の集大成として『韓国農耕歳時の研究』を著した。

金宅圭は、1966年の時点では「歳時風俗」を用いず、「年中行事」を用いている。1970年に発刊された「韓国部落慣習史」でも同様である。しかし、1974年の『韓国民俗総合調査 慶尙北道篇』の報告書以降は「歳時風俗」を用いるようになった。

朴俊圭の定義

同時期、朴俊圭もやはり全南地域を集中的に調査し報告書を提出するとともに、歳時風俗の概念規定を試みている (1969a, 1969b, 1970)。当時、全南大学校に所属していた朴俊圭は、1968年に実施された総合調査に参加し、『韓国民俗総合調査報告書 全南篇』(1969b)の「歳時風俗」の項を執筆した。その翌年、論文「上元の歳時風俗と民俗上のポルムナル」で、歳時風俗の定義を次のように記している。

どの民族でもかれらにとってはかれらの生活の中に染み込んださまざまな民俗がある。そのなかには季節にしたがって自然と人事に関して毎年のように慣行されてきた伝来の共同民習があるが、これをひと言で、歳時風俗という (朴俊圭1969a:71)。

朴俊圭の強調点とは、民族性、伝統性である。かれの論文「全南地方の歳時風俗調査研究」では、現実の生活習俗の中でも「特に過去から残存してきたものが民俗の対象となる」(1970:439)とのべている。このことはそれまでの歳時風俗研究に含意されていたものであった。しかし、歳時風俗の定義を明示した上で論を展開する論法は、先に見た金宅圭を除いてそれまでになかった。

また、朴俊圭はつぎのように論じて意識的に「年中行事」の語の使用を避け、「歳時風俗」を用いた。

歳時風俗を年中行事というひとがしばしばいる。しかし、私はこれを同一視したくない。歳時風俗は年中行事的なものではあるが、年中行事それ全部だとはいえない。年中行事の中で伝来されてきた慣習的なもの、すなわち民俗的なものだけを指したい。

もちろん、国家から指示されるある行事が、年中行事化され慣行化されると、これもやはり歳時風俗となるが、その時点では民俗上の意味は考えられない。たとえば、現在、毎年行事化されている「目の日」や「ハンゲルの日」等のものは歳時風俗だとはいえないだろう (1970:447)。

かれは年中行事と歳時風俗を適切に区別しているよい例として、さきに見た李義宅編『韓国年中行事大観』を、区別していない例として、今村鞆『朝鮮風俗集』、呉晴『朝鮮の年中行事』、崔常壽『韓国の歳時風俗』をあげている (1970:447)。つづけて、次のように述べている。

したがって、開化され近代化される過程で登場した新しい行事は、毎年のおこなわれているものであっても、便宜上、従来から概念化されてきた歳時風俗と区別しなければならない。とくにわが国では西紀1896年（高宗33年）に太陰曆乙未11月17日を開国505年1月1日にし、これ以来陽曆を用いるようになったが、それ以降陽曆で新しく制定されてきた年中行事までこれと同一視するのは困難だ。

例年おこなわれる民習中でも民俗上の意味は太陰曆によって守られてきたものを主として考えなければならない（1970:448）。

ここで注目すべき点とは、曆改正がおこなわれた1896年を断層として、（新しい）年中行事／歳時風俗、国家／民間、近代／前近代、陽曆／陰曆の対立構造を想定し、これらが統合関係にあるものとして論じているということだ。すなわち、年中行事とは陽曆で行われる国家的行事であり、近代的な性格を持つ。これに対して、歳時風俗とは陰曆でおこなわれる民間行事であり、前近代的な性格を持つという命題を設定した。そして、民俗学の対象として後者を採択したのである。

この図式によって、民俗学の領域が限定された、しかし、対立する一方のみを研究の対象とすることは、両者の関係を論じることを不可能とするばかりでなく、この図式、つまり学の枠組みそのものを自然化してしまうという弊害をもたらす。わたしは、この図式をそのまま現実に適用するよりも、その枠組みがいったいつ、どのようにして成立したのかを問う必要があると考える。

金宅圭の定義と朴俊圭の定義は対照をなす。前者が構造的に歳時を把握しようとするのにたいして、後者は遡及的である。しかし、この概念の違いが論争となる事はなかった。金宅圭自身は、「われわれは儀礼的年中行事と平素の生産生活との連関がどうであったかということ考察し、伝統生活内でその位置を把握しなければならない」（1966:321）と述べているように、かつての生産関係が崩壊した現在の時点から振り返って、「伝統生活」という原点を想定し時間構造を考察しようとしたため、定義適用上の差はあまりない。その後、朴俊圭の調査データは利用されても、かれの定義は注目されていない。

李杜鉉と和歌森太郎の定義

金宅圭、朴俊圭らは「歳時風俗」の定義をいち早くおこなったが、その後の「歳時風俗」という研究対象の確立と、定義づけについては李杜鉉の影響が強い。李杜鉉は、民俗劇研究が専門で、仮面劇関連の論文、調査報告書が多数ある。『韓国民俗総合調査報告書』（全北篇、忠清北道篇、黄海・平安南北道篇、咸鏡南北道篇）では、「歳時風俗」の項を担当し、民俗学の概説書『韓国民俗学概説』においても「歳時風俗」を執筆している。

李杜鉉は、1971年の論文「韓国歳時風俗の研究」、同年発刊された『韓国民俗総合調査報告書 全北篇』、1974年初版の『韓国民俗学概説』で歳時風俗の定義を示している。記述内容はほぼ同一であるので、『韓国民俗学概説』をみる。それは、本書がもっとも普及した民俗学の概説書で、現在も参照されつづけているからである。なお、日本でも1977年に崔吉城の訳で出版された。再度詳しく李杜鉉の歳時風俗の定義を見よう。

歳時風俗とは毎年一定の時期が来ると慣習的に繰り返して行われる特殊な生活行為、すなわち週期伝承の儀礼的な行為をいう。最近ではふつう年中行事というが、古くから歳時あるいは月令、時令と呼び、とくにその季節を強調している。歳時風俗は節日すなわち祝日とし年間の生活過程に一つのリズムをとり入れて、次の生活行為に拍車をかける、いわば生活のアクセントとしての役割をしてきた（李杜鉉1977（1974）:168）。

上記の文章は、年中行事は広く用いられているが、年中行事ではなく歳時風俗という語を民俗学用語

として採択すること、歳時風俗という語には、年中行事にはない伝承性、季節性が含意されていることを述べている。李杜鉉が、歳時風俗の周期性、生産活動との関連性を強調する点においては、金宅圭と同じである。しかし、かれは金宅圭のように「年中行事」という語を使用しなかった。それは、朴煥圭と同様に「歳時風俗」という語に「年中行事」にはない歴史性を読み込んだからだ。したがってこの定義は金宅圭と朴煥圭を包括した定義のようにみえる。金宅圭は後に、「年中行事」という語を使わなくなったばかりでなく、李杜鉉のものを参照して歳時風俗の定義を下している¹⁷。李杜鉉以降の「歳時風俗」の定義は、主として李杜鉉、もしくは李杜鉉の定義を引用した金宅圭の著作(1985:2)にしたがっている。

しかし、本論の「はじめに」で検討したように、彼自身は上記二人の論によってではなく、日本の民俗学者和歌森太郎の『年中行事』(1966)に依拠して定義を示した。このことは、和歌森の著作が参考文献に示されていること(1971a:43,1971b:471)、文面自体が似ていることから判断できる。

ただし、和歌森が「年中行事」としている部分は、「歳時風俗」と翻訳し、また、日本の事例ではなく韓国の事例をあげて説明している。韓国の文脈にそって、日本語でいう「年中行事」を、韓国語でいう「歳時風俗」として定義づけたということだ。このようにして、李杜鉉は、言葉上、韓国民俗学から日本語起源の「年中行事」という語を排除しながら、定義としては日本民俗学でいうところの「年中行事」の概念を導入したといえる。

日本民俗学の定義の引用が可能であったのは、日韓の民俗の類似性があげられるかもしれない。多くの論者がこのことを指摘しているが、和歌森太郎も、東アジア一帯の文化を親近性があったものと捉え、中国、朝鮮半島全体を包括するような「年中行事」の概念を設定した(1966:20)。李杜鉉も「われわれ民俗社会の生活と農耕儀礼的な歳時風俗等に大陸から影響を受け同化させたものも多く、また日本で伝承されている年中行事のなかには、われわれのものと同じ系統のものとして考えられるものも多く、このような隣接地域との歳時風俗の比較研究も切実な課題のひとつだ」(1971a:42)と、日本、中国との歳時風俗の類似性と比較研究の重要性に言及している。

しかし、文化の類似と差異というのは相対的なものでしかない。むしろ、重要なのは、比較を可能とする単位、すなわち国家という民俗の単位、そして、民俗の下位分類としての「歳時風俗」が確立されたことである。日本語でも一般に、「年中行事」と言えば、国民の祝日のような歴史的深度の浅い行事も含まれる。しかし、従来の民俗学研究の対象になってきたのは、やはり近代以前から行われてきた正月や小正月行事、盆、節供などであった。同時代に出版された『日本民俗事典』(大塚民俗学会1972)の「年中行事」の項では、年中行事とは、「毎年同じ暦時に同じ様式の習慣的な営みがくりかえされるような[・]・伝承的行事」(1972:546、傍点大石)であると定義されている。このように、日本民俗学においても、民俗研究の対象には伝承性の要素が必要だと考えられてきた。上で見たように、韓国民俗学における「歳時風俗」という語にも伝承性が含意されている。したがって、日本民俗学でいうところの「年中行事」と韓国民俗学でいうところの「歳時風俗」は、概念上は一致し、国家の境界によってその対象が区分されたと言える。

朴桂弘は、毎年週期的に繰り返される伝承的行事として、「わが国では普通歳時風俗と呼ぶが、中国ではこれを歳時、または月令といい、日本では年中行事という」(1987:371)と無造作にいつている。しかし、相互の用語が厳密な意味で翻訳可能となるためには、それぞれの国家に国単位の「伝統」があると想定する民俗学が存在し、その学問に韓国の「歳時風俗」に相当する実体を構築する思想体系がなければならない。これを成立させたのが、暦と国家を外枠とする地域の格子による分類である。

和歌森太郎も李杜鉉も、自国の民俗学の確立に大きな役割を果たした。このこととかれらのトランス

ナショナルな志向性は矛盾しない。李杜鉉にとって「わが国の歳時風俗の究明はひいてはわが国の文化の本質を究明する作業の一環である」(1971a:41)とのべているように、民俗の比較はあくまでも自国文化の究明のためであった。また、和歌森が「日本の年中行事の研究には、隣国のそれとの対比を忘れてはその本質を見わけがたくなる」(1966:21)と述べているように、ナショナルな言説は他国との相互作用によってのみ成立可能であるからである。

このように、1960年代後半から1970年代前半にかけては、歳時風俗研究の確立期であり、韓国民俗学の確立期だった。学問としての確立は、第一に、近代／伝統の枠組みにおいては「伝統」を、地理的な領域においては「韓国」を引き受けたこと。第二に、フィールドワークを行ったこと。第三に、韓国人の伝統的生活の総体を、行政区画と民俗の項目によって把握し、分類したことによってなされた。そして、民俗学の確立は、朴正熙大統領時代の文化政策の要請にこたえるものだった。

以上見てきたように、研究対象の限定と概念化、方法の特殊化は学問分野の確立の条件である。この過程で、日本民俗学の成果が導入されてきたことを、この歳時風俗の定義は示している。日本の「年中行事」の定義の引用の背景には、次の二つのことが言える。第一に、植民地期に、すでに、朝鮮半島という地理的領域に対応する近代と伝統という対立の枠組みと、「年中行事」という民俗の下位分類が成立していたということ、第二に、1960年代大韓民国という民族国家のナショナリティを再構成するための政治的要請があったことである。そのため植民地時代に構築された思考の型と調査・分類という方法は再利用されたのである。

3. 「歳時風俗」から「歳時儀礼」へ —1970年代から現在—

3-1 歴史復元的接近から変動論的・通時的接近へ

前章で見たように、1970年代以降、韓国民俗学は体系化された。以下、その後の韓国内の歳時風俗研究動向について簡単に示す。李杜鉉は、歴史復元的接近を認めながらも、1971年という早い段階で、現在直面している民俗の変化自体にも注意を促した。論文「歳時風俗の研究」において、マードックを引用し、社会学的もしくは文化人類学的な観点から文化変容の問題を考察しなければならないとのべた(1971a:2-4)。さらに、彼は、韓国民俗総合調査が始まって10年後の1978年、文化人類学会でのシンポジウム「全国民俗総合調査の回顧と展望」において、産業化、都市化と行政の介入によって、おおくの歳時風俗が消滅させられているにもかかわらず、総合調査は歳時風俗の通時的变化や地域差を明らかにすることができなかつたと自己批判し、文化変容の現象を明らかにすべきだと強く主張した(1978:151)。そして、その後、現地調査に基づいて文化変容に言及した論考を発表した(1984)。当時、韓国の社会科学分野全体で社会変動論が盛んに議論されており、李杜鉉の主張はこれに関連している。また、同時期、張籌根も歳時風俗の変化や現代的歳時の行事に注目し始めていた(1977)。

1980年代に入って、金宅圭は『韓国農耕歳時の研究』(1985)を発表した。かれの論考は韓国の基層文化を解明するという目的をもつという点で歴史復元的である¹⁸。しかし、かれはこの著作の中で、歴史復元的接近とは矛盾する、時代相を設定した文化の通時的变化の仮説も同時に示した。さらに、1988年の論文「韓国農耕歳時の二元性」では、歳時風俗は「歴史-通時的側面」と「社会共時的側面」の両面から研究されるべきだと主張するようになっていた。

李杜鉉の変動論的接近と金宅圭の通時的-共時的接近は1980年代後半以降活躍しはじめた次の世代の研究者に引き継がれ、1990年代に入って活発化する。たとえば、金明子は、「近代化にともなう歳時風

俗の変化」(1986)以降、現在に至るまで、歳時風俗の変化の問題に取り組んでいる。また、林在海は、60年代以降の産業構造の変化が歳時風俗にもたらした影響を、ムラの社会関係の側面から明らかにする論文「端午から秋夕へ—安東地域歳時風俗の持続性と変化—」(1989)を発表した。

歴史復元的接近から変動論的・通時的接近への方法上の移行は、1990年代の歴史民俗学の登場によって決定的となった。そして、歴史史料の再検討と解放後から用いられてきた「歳時風俗」の定義の再考をもたらした。たとえば、鄭勝謨は、歳時が記述された時代相と歳時の変化を明らかにするために、『東国歳時記』、『洌陽歳時記』、『京都雑誌』原本の文献学的考証と、原本と光文会版の対照をおこなった。そして光文会版に誤字脱字が多いことを発見し、原本にもとづく現代語翻訳をおこなった(鄭勝謨2001b, 2007)。これは、カノンとしての光文会版を歴史化する研究であるといえる。

歴史民俗学的接近は、概念の問い直しにもつながった。金恵淑は、論文『八関会の機能と変化』(1998)において、歴史民俗学的接近、すなわち民俗の継承とともに変化をも同時に考慮する立場から、「歳時風俗」のかわりに、伝承性という意味を含まない「歳時儀礼」¹⁹という概念を用いることとした。ここで「歳時儀礼」とは、「週期性」のみを考慮した概念であり、伝承されたものであるとか慣習的だとかいう概念は考慮しない(1998:6)と規定している。

近年、「新しい歳時風俗」も含めて歳時の行事を指示するとき、「歳時儀礼」、もしくは単に「歳時」、「風俗」という用語が使われる例を見るようになってきている²⁰。「歳時風俗」という用語が問い直されると共に、かつて「年中行事」として排除して来た研究対象が多く取り上げられるようになってきている。たとえば池映任は、論文「顕忠日の創出過程」(2003)において、民俗学の問題として「歳時風俗」ではなく「年中行事」である顕忠日について論じている。すなわち、70年代に民俗学の対象から除外された「年中行事」が、民俗学の対象として再統合されようとしているのである。

「歳時風俗」という語の退行と「年中行事」の再統合は、歴史復元的研究から時系列的研究への転換がもたらした。「歳時風俗」から「歳時儀礼」への移行は、1970年代に確立された民俗学の体系の崩壊の過程でもある。金明子、林在海以降の民俗学者の議論には、1970年代前後に見られた日本民俗学の中心的概念や方法を直輸入するという傾向はみられない。国家儀礼の研究のように、むしろ、共時的に同じ課題に取り組んでいるといったほうがよいであろう。

3-2 国家的歳時風俗事業と辞書の編纂

1990年代後半以降、歳時研究は再度盛んになった。金明子は、この時期に歳時風俗は国家次元の関心の対象となったと指摘し、その背景には歳時風俗を観光資源化するという政府の意図があったと述べている(2007:101)。そのなかでも重要なのが、国立文化財研究所による道別の歳時風俗の報告書の刊行と、国立民俗博物館による『歳時風俗辞典』の編纂事業である。以下、この二つの事業を中心に記述する²¹。

国立文化財研究所の活動として、分野別民俗総合調査の一環として、道ごとに歳時風俗の報告書『歳時風俗』が出版された²²。基本的な資料収集方法と配列方法は70年代前後におこなわれた全国民俗総合調査の延長線上にある。つまり、地域ごとに現地調査し、調査資料を正月から閏月まで順に列挙するという編集方法をとっている。しかし、その調査量と資料の質には格段の差がある。分野別民俗総合調査では、民俗を専門とする調査者が各市郡ごとに3マウル(ムラ)ずつ現地調査し、その調査をもとにマウル単位で歳時風俗を表記している。この資料によって全国的に各「歳時風俗」の分布が明らかにされ、地域間の比較と地域の特色の抽出が可能となった。

国立民俗博物館(以下、民博)では『歳時風俗事典』(2005-2007)が編纂された。その辞書編纂に至る経

緯を詳しく見たい。

民博が歳時風俗に力を入れ始めたのは、ちょうどIMF経済危機の時期であった。1980年代後半以降の経済危機の中で、歳時風俗は政策的にも、学問的にも文化資源として注目されるようになっていた。このような時代状況において当時の館長李鐘哲がリーダーシップをとり歳時風俗関連の事業がおこなわれるようになった。民博では1990年代前半から、歳時風俗の参加体験型の教育活動を行っていた。たとえば1994年2月には「旧正月伝統遊び広場」を開催し、観覧客が実際にノルティギ、ユンノリ、コマなどの正月遊びが楽しめる機会を提供している（国立民俗博物館1996:289-290, 292）。このような歳時風俗関連の体験行事は現在も継続して実施されている。この活動のあゆみにおいて大きな出来事とは、金大中大統領夫妻の来館であった。民博の広報誌『民俗消息』には、正月遊びを楽しむ文化体験型の活動「新しい希望「正月」文化祭り」開催中の2月18日、金大中大統領夫妻が博物館を訪問し、観覧客と共に投壺や凧揚げを楽しんだとある（国立民俗博物館2000:9-18）。民博歳時風俗事典担当者によると、このとき金大中は歳時風俗の重要性を強調する発言をおこなったという。そして、このことが民博による辞書編纂の出発点となった。

また、民博では大統領来館以前の1997年から歳時風俗の研究プロジェクトが始まっていた。1997年、1998年には研究報告書『韓国の歳時風俗』1,2巻が発刊されている。そして、1998年10月には、文化観光部の歳時風俗の生活化推進政策の一環として、民博で「伝統歳時風俗の現代化と観光資源化方案」という主題で学術発表会が開催された（国立民俗博物館1998年10月16日）。

民博の事業は、金大中大統領の文化振興政策にバックアップされ、90年代の終わりから活発化した。『朝鮮日報』によると、1998年当時、学芸職員は15名だったが、2003年9月には40余名に増えた。遺物購入費も年平均2億ウォンであったのが、37億余ウォンに増加したという（2003年9月16日）。以上の背景の下で、歳時風俗事典の編纂が始まった。

『歳時風俗事典』の編纂のプロジェクトは2001年に始まった。この辞書編纂事業の一環として『歳時風俗資料集』（2003-2007）も編纂されている²³。この事業はかつての全国民俗総合調査と質的に異なる。その違いとは、歳時風俗の変化と「新しい歳時風俗」に留意し調査、編纂している点である。たとえば、『歳時風俗資料集』は、三国時代から現在までにわたって、時代別に編纂されている。これは、歳時風俗の時代的特徴と変化を抽出するための基礎資料となる。また、『歳時風俗事典』の特徴的な点とは、「新しい歳時風俗」をも事典の項目に取り入れていることである。各編の項目は大きく陰暦と陽暦に区分されている。陰暦の項（「正日」、「節季」、「月内」、「生業」）には伝統的な歳時の行事が記述されているが、陽暦の項、すなわち「陽暦歳時」には公休日や「現代歳時」が記載されている。たとえば、『歳時風俗事典-春編』（2005）の「陽暦歳時」には、「セント・バレンタイン・デー」、「卒業式」、「三一節（抗日独立運動記念日）」などの項目が記載されている。いずれも韓国の生活に定着しているが、従来の歳時風俗研究では正面から扱われてこなかった行事である。

以上のように、1990年代以降の経済危機のもとで、民俗調査と資料編纂は国家の支援を受けむしろ活発化している。1960年代後半から70年代前半にかけて、国家の介入によって民俗調査が進展し、定義化がされたのと同様の事態が1990年代以降進行しているといえる。

民俗事象の収集と分類の徹底化は、逆に70年代に確立された民俗学の概念を揺るがすものとなっている。ただし、行政的に観光資源として「固有性」、「伝統性」を構築する言説の再生産はますます強く民俗学に要請されるようになっていく。

まとめ

生活を対象化する方法として歳時の行事が重要視されてきた理由は、それ自身で、暦という分節体系をもっているからだと思われる。暦をインデックスとすることによって、雑多な日常生活を整理することが可能となった。ここに、地域や国家という地理的項目が交差することによって、この項目にふさわしい朝鮮人、韓国人の行為群が振り分けられ、トータルに朝鮮人、韓国人の行動様式を想像することが可能となった。

「歳時風俗」の概念の成立と解体の過程をまとめると次のようである。朝鮮では日本などの列強による植民地化の圧力の下、朝鮮人自身の手によって歳時をとおして朝鮮を文化的にアイデンティファイする試みがはじめられていた。しかし、それは日本の支配によって中断され、歳時の理論的、体系的把握の試みは、植民地体制下の1920年代以降となる。そして、歳時の行事に関する研究は、現在に至るまで、次の三段階を経てきた。

第一段階は、1930年代前後の朝鮮民俗学が盛んとなった時代である。朝鮮固有の伝統として歳時が注目されたが、収集された歳時は、総督府にかかわった研究者によって「年中行事」として記述された。この時代に、近代／伝統の二項対立的枠組みが確立したといえる。

第二段階は、朴正熙大統領の文化政策が始まった時代である。民俗学は国家によってナショナル・アイデンティティを構築する言説としての役割を期待され民俗学の学としての確立がこころみられた。1968年に始まった全国民俗総合調査では、調査項目として「歳時風俗」が設けられた。ここで調査の対象となったのは、伝統的歳時であった。上記の二項対立的枠組みのもと、調査の対象が限定された。また、同時期、日本の民俗学の「年中行事」の定義が韓国民俗学に導入された。

韓国民俗学の確立は、(1) 近代／伝統の枠組みにおいては「伝統」を、地理的な領域においては「韓国」を引き受けたこと。(2) フィールドワークを行ったこと。(3) 韓国人の伝統的生活の総体を、行政区画と民俗の項目によって把握し、分類したことによって可能となった。

日本の「年中行事」の定義が引用された理由は、(1) 植民地時代に、すでに、朝鮮半島という地理的枠組みに適應する近代と伝統という対立の枠組みと、「年中行事」という民俗の下位項目、民俗の調査方法が成立していたこと、(2) 大韓民国という民族国家のナショナリティを構築するのに植民地時代に構築された思考の型と調査・分類という方法が有効であったためである。

1990年代から現在までは第三段階にあるといえる。政府の支援によって歳時風俗研究は進展した。しかし、ナショナル・アイデンティティを担うはずの民俗学研究の発展は、逆に、近代／伝統の枠組みとナショナルな枠組みとの一致を困難にさせている。それは、「歳時風俗」の概念の問い直しにつながっている。

これまで見てきたように、両国の民俗学をまったく別々に成立したものとみなすことも、日本の民俗学の学説を韓国の民俗学者が受動的に受け入れたとみなすこともできない。用語に関しても、その概念の背景を踏まえずに、一方の民俗学の用語によって他方を解釈することはできない。

今後、越境的な民俗学を構築するために、共通の学術用語を作り出すこともひとつの方法だとも思う。ただし、「歳時風俗」や「年中行事」の語を直ちに排除することを主張するのではない。現在使用されている「歳時風俗」や「年中行事」の使用には、現在のポストコロニアルな状況が色濃く反映している。このことを踏まえたうえで、用語や問題の共有、討論の場を共有することによって、あらたな民俗学の方向を模索できるのではないかと考えている。

なお、本論文では、韓国民俗学を主軸におき、この主題にかかわりの深い比較民俗学史、日本の年中行事研究史について論じることができなかった。今後の検討課題としたい。

[付記] 本稿の一部は、地域文化研究所月例研究会（2006年12月2日、地域文化研究所、ソウル市）、日本民俗学会第59回年会（2007年10月7日、大谷大学）で口頭発表を行った。本稿執筆にあたっては、鄭勝謨先生をはじめ地域文化研究所研究員の皆さまから貴重なご助言をいただいた。感謝申し上げる。

¹ ただし、「無時」については、朴俊圭の『韓国歳時歌謡の研究』に依拠している（朴俊圭1983:10）。

² 韓国民俗学史、歳時風俗研究史について参照した文献は下記のとおりである。

印権煥1978『韓国民俗学史』悦話堂。

金宅圭1997『韓国農耕歳時の研究』第一書房。

朴桂弘1987『増補 韓国民俗学概論』螢雪出版社。

金明子1990「韓国歳時風俗研究の史的検討」安東大学民俗学研究所『韓国民俗と文化研究』螢雪出版社。

印権煥1997「歳時風俗の概念と歴史的变化」国立民俗博物館編・発行『韓国の歳時風俗1:ソウル京畿江原忠清道編』。

鄭勝謨 著・黄憲萬 写真2001『韓国の歳時風俗』図書出版学古齋。

イ・チャンイク2005『朝鮮後期曆書の宇宙論的複合性に関する研究』ソウル大学校博士論文, 89-92。

金明子2007「歳時風俗研究50年」梨花女子大学校韓国文化研究院『伝統文化研究50年』図書出版へアン。

³ わたしの越境的関係を考慮に入れた事例分析については、大石和世2004「伝説を通して表象される日韓関係—ポスト・コロニアル状況下における王仁博士顕彰運動について—」(『福岡発・アジア太平洋研究報告』13号, 1-9)がある。

⁴ リチャード・ドーソンは、民俗資料を使用して歴史を復元する方法をhistorical-reconstructionalと命名した。任敦姫、ロジャー・L・ジャンネリはこれを「歴史復元的」と韓国語に翻訳し、日本、韓国両国の民俗学は歴史復元的性質を帯びているとした（任敦姫1995:31-32）。

⁵ 姜在彦は、崔南善[1911朝鮮光文会発行、以下、光文会版と略す]に基づいて『洌陽歳時記』を日本語に訳出している。光文会版ではこの部分は末尾に記されているが、現存する写本のうち、原本に最も近いとされる延世大学所蔵本では、この文は冒頭にあるため(鄭勝謨2007:49-69,105)、ここでは冒頭にあるとした。

⁶ 訳については、柳得恭著、金允朝訳（2005:63-64）参照。

⁷ 西北学会とは1908年1月、西友学会と漢北学会を統合して設立された愛国啓蒙団体である。国権回復と人権伸長を通じた立憲共和国の樹立を目的とした。1910年9月、朝鮮総督府によって強制解散させられた（『韓国民族文化大百科事典』<http://www.encykorea.com>, 2007年11月15日）。

⁸ 翻訳にあたっては、原文のニュアンスを伝えるため漢字

はそのまま残しハングルのみ日本語に置き換えた。また、読みやすくするために句読点を加えた。

⁹ 『洌陽歳時記』の底本については、『朝鮮大歳時記』III [国立民俗博物館2007]、高麗大学校図書館所蔵『洌陽歳時記』筆写本を参照して判断した。『洌陽歳時記』筆写本の異本は三冊ある。それぞれ、延世大学校図書館、国立中央図書館、高麗大学校図書館が所蔵している。高麗大本を西北学会版の底本と推測した理由は、構成や見出しがもっとも一致していること、高麗大本の誤字がそのまま西北学会版に登載されていることからである。

¹⁰ 本文中の高麗大本にあり、西北会版に見られない部分は以下のとおりである。（ ）内は見出し。

「此漢唐以來中朝之所不及也」(元日)。「盡東京以立春日下寛大書之意也」(元日)。「烏告之說雖甚荒誕中國無是物則起於土風似不誣也近閱唐韋巨源食譜有曰油畫明珠注云上元油飯摠藥飯材料而約言之必將曰油飯畫者丹漆錯也明珠者潤麗色也意藥飯故是中國物而傳于東自新羅始好事者從而傳會耳然則中國之昔有而今無何也曰周魯無禮制而官紀於郊河洛無絃誦而儒興於閩物固有然者豈獨藥哉」(上元)。「倣宋朝故事」(三月)。「昇遐後五年甲子臣忝閣職肅拜奉楹堂仍行春節大奉審曝皆有窩四部書時苑中百花盛開老吏前導者指所歷池臺亭榭曰此先王宴閣臣處也竚立瞻望有珠簾羽帳之感」(三月)。「周禮夏官司燿掌火令」(寒食)。「中國燃燈用上元而東俗用」(四月八日)。「國人稱端午曰水瀨日謂投飯水瀨享屈三閭也地之相去萬有餘里世之相後千有餘年謠俗不改精爽如在何令人感慕至此也抑東人之懷賢好古別於他方如韓子所云燕趙之士出乎其性者耶」(端午)。「辟鬼防於中華不專爲國俗故茲不詳別」(冬至)。

¹¹ 1911年に朝鮮光文会から発刊された崔南善編『東国歳時記・洌陽歳時記・東国雑記』は、『東国歳時記』、『洌陽歳時記』、『東国雑記』三冊の合本。発刊年を基準にすれば、本書は大韓帝国時代のものではない。しかし、朝鮮光文会の活動は大韓帝国時代の国民啓蒙運動を直接に引き継いだものであるためこの時代に含めた。

¹² 引用は、日本語版『韓国農耕歳時の研究』(金宅圭1997)による。ただし、原文の韓国語版(金宅圭1985)に従って、日本語版で「歳時習俗」となっている語は、「歳時風俗」に置き換えた。以下の引用も同様である。

¹³ 全京秀『韓国人類学の百年』に簡単な呉晴の略歴、著作に関する紹介がある(2004:137)。

¹⁴ この時代の歳時風俗と年中行事の語の使用の未分化につ

いては、すでに朴俊圭が指摘しているが(1970:447)、ここでは歴史的にその流れを把握するために詳細に見た。朴俊圭の主張については次節で詳しく検討する。

¹⁵ 印権煥は、民俗学全体を見通しその趨勢を把握する観点から時代区分をしており、その観点において1970年代を転換期とすることに同意する。本稿は、先駆的な業績に注目するため、転換期を早めに設定した。

¹⁶ 『韓国の民俗大系 2 全羅北道篇』(韓国文化広報部1988)、『韓国民俗総合調査報告書 2全羅北道篇』の日本語版の目次の主要項目は以下のとおりである。

- 第1篇 社会(部落生活、親族、家族、通過儀礼)
- 第2篇 民間信仰(部落および個人信仰、巫俗信仰、仏教民俗、新興宗教)
- 第3篇 産業技術(農器具、水産業)
- 第4篇 衣食住(農村の織物手工業、飲食物、住居)
- 第5篇 民俗芸術(音楽と舞踊、演戯)
- 第6篇 歳時風俗と娯楽(歳時風俗、民俗遊び)
- 第7篇 口碑伝承(言語、民謡、説話)

¹⁷ 金宅圭は『韓国農耕歳時の研究』において「歳時風俗」を次のように定義している。「歳時風俗は、日本においては主に年中行事といわれているが、古来歳時、歳事または月令・時令などの用語が使われてきた。これらの用語は、みな日常生活とは区別される特定の生活行為を毎年一定の時期に行うことを指す用語である」(1997上:4)。

¹⁸ 岩本道弥によると、基層文化の語を作り出したドイツではすでにこの語は死語となっているにもかかわらず、戦後、東京教育大学の和歌森太郎を中心として、民俗学は基層文化を研究する学問であるとの言説が形成されたという(2006:71)。金宅圭は1961年に東京大学大学院人類学教室に籍をおいて以来、断続的に日本で研究活動をおこない、1987年には東大の社会学博士の学位を取得した(金宅圭1997:v-xii, 韓民族語文学会1994:5-19)。金宅圭の基層文化論は50, 60年代当時の日本の基層文化論の影響を受けたとみられる。

¹⁹ 1980年代後半以降、歳時儀礼という語が用いられるようになってきたとみられる。もともと歳時儀礼は儀礼研究の文脈で用いられてきた用語である。張哲秀は、ヴァン・ジェネップにもとづいて歳時儀礼を平生儀礼、領域儀礼とともに広い意味での通過儀礼に含めている(1995:81)。

²⁰ たとえば、金明子は、「歳時風俗の教育的意義と実践化」において、金惠淑論文(1998)を引用し、「歳時風俗」より、「歳時儀礼」という用語が適切であるとしている(2003b:178)。また、近年行われた学会でも「歳時儀礼」もしくは、「歳時」という語が用いられている。たとえば、2006年5月19日に行われた第38回韓国文化人類学会定期学術大会の主題は、「現代韓国社会の人生儀礼と歳時儀礼—変化と持続—」であり、姜正遠「京畿道トゥントゴルの歳時の変化とその意味」、パク・ソンヨン「都市名節祭祀の規範と実際—社会的時間性との関係を中心に—」が発表された。

²¹ 1990年代以降の歳時風俗研究の流れについては、金明子「歳時風俗研究50年」(2007)にくわしい。国立民俗博物館の『歳時風俗事典』編纂事業に関しては、博物館学芸員民俗研究課歳時風俗事典担当者ヘインタビューをおこ

なった(2007年2月26日)。担当者からは論文執筆に関して貴重なアドバイスをいただいた。

²² 国立文化財研究所編・発行『京畿道・歳時風俗』(2001)、『江原道・歳時風俗』(2001)、『済州島・歳時風俗』(2001)、『忠清北道・歳時風俗』(2001)、『忠清南道・歳時風俗』(2002)、『慶尚北道・歳時風俗』(2002)、『慶尚南道・歳時風俗』(2002)、『全羅南道・歳時風俗』(2003)、『全羅北道・歳時風俗』(2003)。

²³ 事典としては、『歳時風俗事典-正月編』(2005)、『歳時風俗事典-春編』(2005)、『歳時風俗事典-夏編』(2005)、『歳時風俗事典-秋編』(2006)、『歳時風俗事典-冬編』(2006)、『歳時風俗事典-付録及索引編』(2007)が発刊された。また、歳時風俗資料集としては、『韓国歳時風俗資料集成—三國・高麗時代編』(2003)、『韓国歳時風俗資料集成—朝鮮前期文集編』(2004)、『韓国歳時風俗資料集成—朝鮮後期文集編』(2004)、『韓国歳時風俗資料集成—新聞・雑誌編—(1876-1945)』(2003)、『韓国歳時風俗資料集成—現代新聞編—』、『中国大歳時記』I,II(2006)、『朝鮮大歳時記』I-IV(2003-2007)が発刊された。

参考文献

朝鮮・韓国語文献(カナダラ順)

新聞記事

『東亜日報』

『毎日申報』

『朝鮮日報』

単行本・論文

姜正遠

2003「近代新聞ならびに雑誌にみられる歳時風俗」国立民俗博物館『韓国歳時風俗資料集成—新聞・雑誌編(1876-1945)』国立民俗博物館, pp.617-643.

国立文化財研究所編・発行

2001-2003『歳時風俗』.

国立民俗博物館編・発行

1996『国立民俗博物館50年史』

1997『韓国の歳時風俗I ソウル・京畿・江原・忠清道編』.

1998『韓国の歳時風俗II 全北・全南・京北・京南・済州道編』.

1998年10月16日『伝統歳時風俗の現代化と観光資源化方案』第34回国立民俗博物館学術発表会資料.

2000『民俗消息』56号.

2005-2007『歳時風俗事典』.

2007『朝鮮大歳時記』III.

金明子

1986「近代化による歳時風俗の変遷」金泰坤『韓国の民俗』3, 慶熙大学民俗学研究所, pp.35-56.

1990「韓国歳時風俗研究の史的検討」安東大学民俗学研究所『韓国民俗と文化研究』蜚雪出版社, pp.1-23.

2003a「崔仁宅先生の論文についての討論文(洞祭の変化様相を通して見た歳時風俗と宗教性)」『比較民俗学』24: 193-196.

2003b「歳時風俗の教育的意義と実践化」『比較民俗学』

- 25: 175-208.
- 2007「歳時風俗研究50年」梨花女子大学校韓国文化研究院編『伝統文化研究 50年』図書出版ヘアン, p.77-124.
- 金容徳
1994「民俗学報告書と資料集の刊行」崔仁鶴・崔来沃・林在海編『韓国民俗研究史』知識産業社, pp.51-74.
2004「歳時風俗」金容徳著, 任東権・崔仁鶴監修『韓国民俗文化大事典』下巻, 図書出版倡率, p.1027.
- 金宅圭
1966「慶北地方の年中行事一行事・由来・共同娯楽一」『青丘大学論文集 人文・社会・自然科学』9, 青丘大学出版部, pp.321-344.
1974「歳時風俗」韓国文化人類学会編『韓国民俗綜合調査報告書 4 慶尙北道篇』文化公報部文化財管理局, pp.564-631.
1985『韓国農耕歳時の研究 嶺南大学校民族文化研究所民族文化叢書 11』嶺南大出版部.
1988「韓国農耕歳時の二元性」『韓国文化人類学』20: 107-151.
- 金恵淑
1998『八閔会の機能と変化』韓国精神文化院 韓国学大学院修士学位論文.
- 朴桂弘
1987『増補 韓国民俗学概論』螢雪出版社.
- 朴煥圭
1969a「上元の歳時風俗と民俗上のポルムナル」『語文学論集』5, 全南大学校 文理科大学, pp.71-95.
1969b「歳時風俗」韓国文化人類学会編『韓国民俗綜合調査報告書 1 全南篇』文化公報部文化財管理局.
1970「全南地方の歳時風俗調査研究一特に旧正月の遺俗に関して一」『省谷論叢』1, 省谷学術文化財団, pp.438-549.
1983『韓国歳時歌謡の研究』全北大学校博士学位論文.
- 朴賢珠
1995「日帝の朝鮮文化研究」『民俗学研究』2号, pp.9-28.
- 方鐘鉉
1946『歳時風俗集』研学文庫, 研学社.
1981(1939)「朝鮮の年中行事」『朝光』5, 朝鮮日報社『朝光』学研社, 影印本
- 西北学会
1976(1909)「我国歳時風俗記」『西北学会月報』10巻 13-15号, 韓国学文献研究所編『西北学会月報 韓国開化期學術誌』第7-9巻, 亜細亜文化社 影印本.
- 生活教育研究会
1959『教育講話事典』教文館.
- 孫晋泰
1981(1948)『朝鮮民族史概論』孫晋泰『孫晋泰先生全集』1, 太学社, 影印本.
- 宋錫夏
1935年6月22日-7月10日「農村娯楽の助長と浄化に対する私見 -特に伝承娯楽と将来娯楽の關係に就て-」『東亜日報』(全20回).
1936a「朝鮮各道民俗概観 全羅道篇」『新東亞』6(1):101-104.
- 1936b「朝鮮各道民俗概観 黄海道篇」『新東亞』6(5):94-101.
- 吳明錫
1998「1960-70年代の文化政策と民族文化談論」『比較文化研究』4:121-152.
- 柳得恭著, 金允朝訳
2005『だれが知るだろうか—柳得恭散文集—』, 太学社.
- 李起弘
1957『年中行事解説』韓国輿論社.
- 李能和
1927『朝鮮女俗考』翰南書林.
1977『朝鮮道教史』韓国学研究所.
- 李杜鉉
1971a「韓国歳時風俗の研究」『1970年 文教部 研究報告書』(人文科学系1) 15, 文教部, pp.1-84.
1971b「歳時風俗」韓国文化人類学会編『韓国民俗綜合調査報告書 2 全北篇』, 文化公報部文化財管理局.
1978「全国民俗綜合調査の回顧と展望」『文化人類学』10:151-154.
1984『韓国民俗学論考』学研社.
- 李杜鉉・張壽根・李光奎 共著
1974『韓国民俗学概説』民衆書館.
- 李允熙
1948『わが国の歳時記』金龍圖書.
イ・チャンイク
2005『朝鮮後記歴史書の宇宙論的複合性に関する研究』ソウル大学校博士論文.
- 李義宅編
1959『韓国年中行事大観』国民報社.
- 印權煥
1978『韓国民俗学史』悦話堂.
1997「歳時風俗の概念と歴史的変化」国立民俗博物館編・発行『韓国の歳時風俗』ソウル・京畿・江原・忠清道編].
- 任敦姫, ロジャー・L・ジャネリ
1995「崔南善の1920年代の民俗研究」『民俗学研究』2:31-56.
- 林在海
1989「端午から秋夕へ—安東地域歳時風俗の持続性と変化—」『韓国文化人類学』21:341-365
- 張哲秀
1995『韓国の冠婚喪祭』集文堂.
- 鄭勝謨著・黄憲萬写真
2001a『韓国の歳時風俗』図書出版 学古齋.
- 鄭勝謨
2001b「歳時関連記録を通してみた朝鮮時期歳時風俗の変化」『歴史民俗学』13, 歴史民俗学会.
2007「朝鮮時代歳時記 国訳の成果と意義」国立民俗博物館編・発行『朝鮮大歳時記』III, pp.49-69.
- 趙南斗
1980「民俗学者 吳晴先生」『ヨルメ』11月号:88-92.
- 池映任

- 2003「顯忠日の創出過程—殉国先烈と戦没将兵を中心に—」『比較民俗学』25:591-611.
- 崔南善 編
1911『東国歳時記・洌陽歳時記・京都雑誌』朝鮮光文会.
- 崔南善
1925年10月2日-11月1日「秋夕」『東亜日報』.
1934年5月20日「觀登」『毎日申報』.
1946『朝鮮常識問答』東明社.
1948『朝鮮常識』風俗篇, 東明社.
- 崔常壽
1956.11.27-2.21「韓国の歳時風俗 一年中行事記一」『東亜日報』.
1957「韓国の歳時風俗 一年中行事記一」『韓国民俗学報』2:35-126.
1960『韓国の歳時風俗 一年中行事記一』韓国民俗学研究叢書3, 高麗書籍.
- 車相瓊
1947『朝鮮史外史』明星社.
- 太陽文化社編集部編
1961『年中行事大典』太陽文化社.
- 韓国文化人類学会 編
1969『韓国民俗綜合調査報告書Ⅰ全南篇』文化公報部文化財管理局.
2006『現代韓国社会の日常儀礼と歳時儀礼—変化と持続—』第38次 韓国文化人類学会の学術大会発表要旨集.
- 韓民族語文学会
1994「斗山金宅圭博士年譜」『韓民族語文学』5-19.
- 洪錫謨著、朴時亨訳
1984 (1946)「東国歳時記」『新天地』1 (4,9) ソウル新聞社『新天地』国学資料院影印本.
- 日本語文献**
アンダーソン
1997 (1991)『増補 想像の共同体』NTT出版. (Anderson, Benedict., 1991, *Imagined Communities: Reflection on the Origin and Spread of Nationalism*, London:Verso)
- 李杜鉉 他著, 崔吉城訳
1977 (1974)『韓国民俗学概説』学生社.
- 岩本道弥
2006「戦後民俗学の認識論的変質と基層文化論」『国立歴史民俗博物館研究報告』132:25-98.
- 今村鞆
1914『朝鮮風俗集』斯道館.
- 岩竹美加子
1999a「[[重出立証法]・[方言周圏論]再考]『未来』396号.
1999b「[[重出立証法]・[方言周圏論]再考(二)]『未来』397号.
1999c「[[重出立証法]・[方言周圏論]再考(三)]『未来』399号.
- 上野和男他編
1974『民俗調査ハンドブック』吉川弘文館.
- 大塚民俗学会
1972『日本民俗事典』弘文堂.
- 川村湊
1996『[大東亜民俗学]の虚実』講談社
韓国文化公報部文化財管理局編、竹田旦・任東權訳
1988-1992『韓国の民俗大系—韓国民俗綜合調査報告書—』全5巻, 国書刊行会.
- 姜在彦訳注
1971『朝鮮歳時記』東洋文庫193, 平凡社.
- 金宅圭
1997『韓国農耕歳時の研究 Academic Series NEW ASIA22』上下巻, 第一書房 (1985嶺南大学校 民族文化研究所 民族文化叢書11, 嶺南大出版部).
- 坂本要
2000「年中行事」福田アジオ他編『日本民俗大事典』下, 吉川弘文館.
- 島村恭則
2001「[[日本民俗学]から多文化主義民俗学へ]篠原徹『近代日本の他者像と自画像』柏書房, pp.307-344.
- 須永敬
2003「[[韓国境域の聖母神に関する一考察]『日本民俗学』234:31-61.
- 朝鮮総督府 (呉晴 著)
1931『朝鮮の年中行事』朝鮮総督府.
- 朝鮮総督府 (村山智順 著)
1941『朝鮮の郷土娯楽』朝鮮総督府.
- 全京秀著, 岡田浩樹・陳大哲訳
2004 (1999)『韓国人類学の百年』風響社
- 崔吉城
2000「[[日帝植民地時代と朝鮮民俗学] 中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社, 171-210.
- 和歌森太郎
1966『年中行事 増補版 日本歴史新書』, 至文堂.
1980『和歌森太郎著作集』第5巻, 弘文堂.
- ウェブサイト**
韓国歴史情報統合システム
<http://www.koreanhistory.or.kr>.
韓国民族文化大百科辞典
<http://www.encykorea.com>.